

第 17 回日本在宅医学会もりおか大会 一般・指定演題

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	医学部学生に対する在宅医療を中心とした地域医療学実習の効果に関する検討 ―キャリア選択上の在宅医療への関心―
演者名	野口麻衣子 1)、山中崇 1)、土屋瑠見子 2)、平野央 1)、玉井杏奈 1) 3)、飯島勝矢 4)
所属	1) 東京大学医学部在宅医療学拠点 2) 東京大学大学院医学系研究科地域看護学分野 3) 台東区立台東病院 4) 東京大学高齢社会総合研究機構

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		9

目的

わが国では超高齢化を目前にして、「治し支える医療」としての在宅医療の推進が強く求められる。在宅医療で行われる医療は、患者・家族との関係構築や患者を取り巻く環境への視点の拡大等が求められる。さらに、介護職なども含めた多職種連携が必要となり、在宅医療に従事する医師の育成には従来の病院実習中心の教育では十分とはいえない。そこで、本研究の目的は、医学部学生を対象に在宅医療を中心とした地域医療学実習を行いその効果を検討することとする。

方法

対象者は在宅医療を中心とした地域医療学実習を受けた医学部 5・6 年生の 42 名である。実習期間は 2 週間、実習内容は 1 週目（オリエンテーション、訪問診療・外来見学、ケアマネジャー同行、中間振り返り）2 週目（訪問看護同行、訪問診療・外来見学、病院 MSW 同行、市民向け発表会、最終振り返り）で構成された。

データ収集は実習最終日に質問票に自記式で回答してもらい、その場で直接回収をした。調査内容は、実習に対する評価及びキャリア選択上の在宅医療への関心について質問した。データ収集期間は 2013 年 11 月～2014 年 6 月であった。キャリア選択上の在宅医療への関心の前後値については McNemar 検定を行った。有意水準は 5%（両側）とした。

結果

回収数は 36（回収率 85.7%）であった。「実習を後輩に勧めることができるかどうか」という設問に対して「そう思う・いくらかそう思う」と答えた者は 27 人（75.0%）であった。また、キャリア選択上、在宅医療への関心を持つ者は実習前 15 人（41.6%）から実習後 25 人（69.4%）（ $p=0.002$ ）へ有意に増加した。

考察

臨床実習として従来踏み込みの弱かった分野に対する本実習プログラムではあるが、その初期の検討として学生の在宅医療への関心を高めることが出来ている可能性が示唆された。今後は、本実習プログラムを受けた学生のキャリアを追跡するなどの長期的なフォローアップが望まれる。